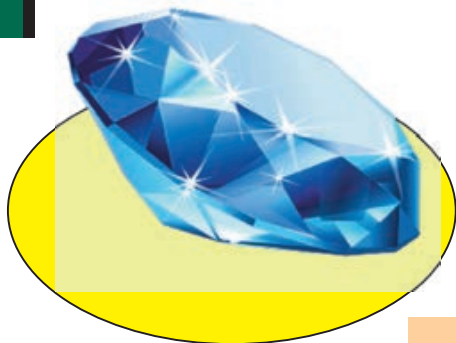


地雷で助かった 兵士

時効事件 ⑤



高木 徳一

靖国神社の境内にハーモニカの音色が物悲しく響き渡る。

優（まさる）は高くに筋雲が張り付く青空に浮かぶ神社の大鳥居を見上げ、やっと気持ちの整理がついて昭和二十一年（一九四六年）十月十七日にこの地に立っていることに感慨を覚えた。

石畳に松葉杖の高い音を残し、やや面長な顔に緊張が走る優が一步、また一步と進み行く。大銀杏の前には大灯笼が幾つも並ぶ。大村益次郎の銅像が参拝客を見下ろしている。軍服の団体、遺族や一般人の親子連れなどで賑わいを見せる。出店がずらっと並び、ろくろ首や鱗女などの見世物小屋もある。

第二鳥居を抜け、神門で一礼して、中に入ると白鳩がチヨコチヨコと歩き回り、染井吉野の葉桜が終わり、数少ない八重の十月桜が咲き始めている。

中門鳥居を過ぎ、手を洗い、拝殿に進み、散ったガキ大将兄弟や戦友の祭神に恭しく礼拝する。

（大将に良介君、お国のために命を捧げられて本望だったでしょう。私みたいな役立たずが、生き残ってしまいました。運命といえはそれまででしょうが、口幅つたいようですが、神様からお呼びが掛かるまでは生きて、あなたの方の分まで働きたいのですが、この身体では無理ですね。そちら側にいけば悩まずに済んだのにと毎夜考えてしまいます。どうか、安らかにお眠り下さい）

今日は秋季例大祭の御霊祭りの日。隣では上条元一等兵が鳩のような丸目を瞑り、英霊に祈りを捧げる。右隣の腕白仲間だった武夫も頭を垂れる。武夫は中学の理科の教師になり、参戦はしていないが、教え子が学徒出陣で多数亡くなっている。参拝後、武夫が黒縁眼鏡を押し上げながら、右手を指差す。

「あそこの『靖国神社宝物館』は敗戦で閉鎖されているんだ」「何故なんだ、武夫」「日清と日露の

戦争に陸軍大尉として活躍した祖父に何時も聞かされていた・「あの顎鬚の爺さんか。遊びに行つた時、何時も日本刀を振りかざしていたな」

「ああ、軍刀を返却したので、日本刀を購入したんだ。祖父の話では、元は『遊就館』と言つて陸軍省が管理している軍事博物館だから、GHQ(連合国最高司令官総司令部)から名前の変更と閉鎖命令が出たそうだ。日本の歴史が描かれ、特に幕末以降の内戦と外国との戦争の遺品が陳列されているらしい。鎖国による江戸三百年の天下安泰の後、ペリーの黒船来航で国内が開国派、開国反対派に二分され、衝突が凄まじくなり幕末から維新へと変化し、富国強兵策から軍部が台頭し、戊辰戦争から日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦へと突き進んだ過程が絵画、写真付きで説明されると。刀、銃、大砲、軍服、階級章、勳章もあり、両親、兄弟姉妹、妻、子供、恋人に送つた別れの手紙の一字一句に胸が詰まる思いだつたと言つて

た」「そうなんだ」「特に、日露戦争の三勇士には泣けてくると目頭を熱くしていたよ」「どういふこと」「銃撃戦で膠着状態だつた時に、三人が飛び出し、前方のイバラ線を切り出した。敵弾を受けながら切つたイバラの上につつ伏せになり、早く、私の背中を踏み台に突撃してくださーいと言ひ残し、絶命したと。その犠牲で味方は勝どきを上げる事が出来たそうだ。その三勇士こそ祖父の部下だつた」「大した軍人魂だ。見上げた勇氣だな。自分には出来そうもない。ただ、上官の命令通り戦つただけだからな」「私だつて同じですよ、腰高さん」「第二次世界大戦の緒戦に華々しく大活躍したゼロ戦や人間魚雷、回天もここに奉納され、何年か先には一般公開されるでしょう」「ゼロ戦の神風特攻隊や出撃したら敵艦に体当たりするので戻つて来られない回天の乗組員は、どんな気持ちで特攻を志願したり、命令を受けたのでしょうか」「我々と同じ気持ちだよ、上条君。最初は赤紙

が来て運が悪いと思つたが、徐々に国を、家族を守り抜くために我々も出征したんだとの確信に変わった。「死の恐怖と使命感、運命との戦いだつたんでしょね」「そうだな、激戦地では死神が絶えず背中であつていたが、大勢で突撃するから自分は死なないという望みが少しはあつた。しかし、一人乗務の回天では100%の死だからな」「私の同期入隊三十名の半数が戦死です」「今回の戦争の犠牲者は兵員が約二百三十万人で、一般市民が約八十万人と膨大な数にのぼる。お二人は運が良かったんですよ。彼らの分まで長生きして下さい」優は武夫の澄んだ瞳を見詰めながら頷いた。木陰に小さなごごを敷き、目の前にある鉢植えの白や黄色の菊を眺めながら妻の鈴子（れいこ）が準備してくれた梅干のお握りとお稲荷さんを頬張り、満腹感を味わう。

銅像地点まで戻つた優の首には『祈平和、戦傷』と墨書された白箱がさがつている。

武夫が奏でる『故郷』のハーモニカの音色が人波に優しく響いてゆく。

白い患者服に軍帽姿を見た子供はどうしたの、あの小父さんと母親に質問している。松葉杖で支えられた片足の金属棒を見詰め、ぎよつとする女の子。ごめんね、お嬢さん、驚かせたりして。これも生活のため仕方がないんだよと優は心に呟いた。

同じような衣装の戦傷軍人が両脇に並び、アコーデオンのやバイオリンで軍歌を弾く。

上条はもつぱら童謡を披露する。戦地病院での小隊長の自殺以来、軍歌を封印しているのだ。

一銭、五銭、十銭のアルミ貨がチャリンと音がすると、優は有難う御座いますとお辞儀をする。

その繰り返しで、上条ほどの忙しさではなく、脳は暇となる。嫌な表情をしながら素通りする若者、黙って入れてくれる中年男性。ご苦労様でしたと丁寧なお辞儀をしてから百円札を落とす気品のあ

る細姿の老婆がおられた。お礼を述べると、一人息子が南方で亡くなったとのこと。場所を問えばレイテ島と言われ、自分は近くのミンダナオ島と応えた。嫁と男の子二人の孫に囲まれ暮らしている由。何時までもお元気でと声を掛け、別れた。

「驚いたな、一番高い百円札だもん。大学卒の初任給が五百円前後なのに、きつと、お大尽様なんだろう」「そうだな、武夫。世間は広いな」

上条は頬を緩め、『赤とんぼ』を吹き始めた。喜捨して頂けるのは三十人に一人位か。ま、仕方がない、何しろ同じような仲間がざっと見たところ五十人はいるだろう。拝殿に向かう人、戻る人がひっきりなしに目の前を通り過ぎて行く。我聞せずを決め込む人も多い。仕方がないのだ、身内や親戚に戦傷者がいなければその人達の気持ちは分からないのだからと優は思った。

立ちんぼで二時間が経った頃、人波を掻き分け、精悍な顔付きの中年男性に手を引かれた小学五年

生位の児童が手に握った十円札を入れ終わり、優は、「坊や、有り難うね」と親子に頭を下げた。

「とんでもないですよ。お礼を言うのは僕達の方です。いいか、正雄、小父さん達は正雄や父さんや多くの人を守るために戦争に出掛けて、怪我をなさってきたんだ。感謝をしなければならぬんだぞ」「そう言って頂けると、戦争中の苦労も飛んでいきます。有難う御座います」「GHQから帝国主義の元凶だとして優遇された軍人恩給の廃止が勧告され、今年から実施されましたが、傷病恩給は除かれて良かったですね。生活も大変でしょうが、頑張つて下さい」「お心遣い、恐縮です」

二人の背を目で追いながら、理解を示して下さる方も予想以上に多いことを知り、武夫に説得され、物乞いデビューして良かったと思える。以前は、出兵三ヶ月足らずで負傷し、軍功をあげない自分を責め、いっそ戦死していたほうがどんなに楽だったとか、農作業の殆ど出来ない自分が情けなく、

また物をいは恥ずかしく卑しいと思ひ詰めていた。暫くしてから一行は靖国会館一階の休憩室に入り、椅子に腰を入れ、白箱に一礼する。

「それでは有り難く、喜捨されたお金を分配しよう。俺はただ突つ立つていただけだが、上条君は技術を披露しているので一・五倍だな」「とんでも御座いません」と上条は大きな目を出し、続ける。

「妻に小突かれていましたが、羞恥心が取れずにいきましたのを、先輩の申し出で踏ん切りがつき、妻も大喜びでした。半分でも多いくらいです」

「そうか、これからも長い付き合いになるから平等にいこうか」

上条の濃い眉が動き、笑顔になる。

英霊の分も日本国の再建に役立ちたいが、この身体ではいかんともし難い。精々、農作業で手伝えることはこれからもしようと思う。

その後、北へ歩き、早稲田通りから待ち合わせ場

所だった飯田橋駅に着いた。優は再会を約し、握手を交わし、赤ら顔の上条と別れ、上り線の電車に乗ったのを見送った。思いの外稼ぎが良かったのを驚く妻の顔が浮かぶ、背を押してくれた隣の武夫に感謝しつつ。

帰宅後、優が今日の諸々の出来事を妻に話すと、笑顔を浮かべ頷く。鈴子は神棚に礼拝し、踏み台を使って受け取った喜捨金を乗せた。

床に入り、暫らくするとガキ大将らとの幼き日々から今日までの来し方が夢枕に現れた。

どでかい麦藁帽子や野球帽を被った腕白五人組は禁断の掘つ立て小屋に入った。

優は罪悪感と期待感をない交ぜにした表情をしながらガキ大将の健太の後に従う。

お酢の匂いが微かにする。高窓から差し込む夕陽の光に輝く物が眼に飛び込んできた。

「おお、すげえじゃん！ チョウヤトンボだ！」

健太の首太からの親父声に、皆は口を開けたまま立ち尽くす。机には綺麗に羽を広げたチョウが台の上に乗せられ、じっとしている。十匹が並ぶ。アオスジアゲハ、キアゲハ、クロアゲハとそれぞれ声を張り上げる。

し、静かにと優は慌てて人差し指を口の真ん中に立てた。

「こつちには、ギンヤンマ、オニヤンマ、シオカラトンボにイトトンボもいるよ」

眼鏡の武夫が声を潜める。あつちのビンにはカブトムシ、クワガタもいるぜと勝一が口を失せさせた。棚には標本箱が整然と並び、蝶、蜻蛉、甲虫、鍬形がそれぞれ別の箱に収められている。壁にも吊つてある。優はこの光景に度肝を抜いた。

「そろそろ引き返そう、父さんに見付かると大変だから・・・」との優の不安声が終わらない内に、「誰だー、小屋に入っているのはー！」との怒鳴り声が小屋を揺すった。

入り口に仁王立ちの影。

しまった、手遅れかと優の心は凍った。

「全員、早く出て来い！ 毒ガスで死ぬぞー」

皆は一斉に駆け出し、小屋を出た。

「父さん、ごめんなさい。かぎが開いていたのでつい入ってしまった。ごめんなさい」

優は帽子を取って、いがぐり頭を何度も下げた。

何時もはH字型の簡単な南京錠がはめられているのだが、たまたま今は外れていたのだ。大将が小屋に何が入っているかと聞くので、稲や木の害虫を殺す薬が一杯あつて危険だから絶対に入るなと父から言われていると答えたのだ。好奇心旺盛な大将や仲間にはかされ、やむなく脚を踏み入れてしまった。自分にも怖い物見たさがなかったといえは嘘になる。大将や仲間のせいによれば仲間外れにされるのは明らかで、それは出来ない。

「馬鹿もん、あれ程言っておいたのに判らんのか！」

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。